

関西農業史研究会報

No.19=1981.4.25

会報の発行が遅れて、申し訳ありません。以下は、昨年12月に行なった飯沼先生の報告を掲載します。近世農書を中心にやってきた本研究会の総括ともいえる「農書の成立」を扱っています。

1981年度からは、日本近世農書に限らず、更に地域や時代を広げて取り組んでいきたいと思っています。また、分析方法も今後検討していかなくてはと思っています。

第33回例会 飯沼二郎氏(1980.12.6) 「農書の成立」 (8名)

▶日本の農書は17世紀に成立するが、その理由を、古島敏雄・岡光夫・大石慎三郎の諸氏は、近世村落の主要な構成員であるいわゆる「封建小農」自立のための技術の確立、とくに年貢の村請制(戦国時代、生利の質と年貢額を得るための田畑一ふたのり町村一をもつ経営方式)にともなって要求される村役人層の読書計算能力に求めている。そのことは、もちろん、否定すべくもないことであるが、そのさし問題とされている「小農技術」なるものの内容については、必ずしも明らかではない。また、17世紀に農書の成立する地方が、当時における農業技術の先進地でも後進地でもなく、すべて中進地ともいふべき地方であることについても説明されていない。

▶そこで、私は、次のような仮定を立てる。日本における農法の発展過程を、深耕多肥という観点から、耕起具の種類によって、①木鍬段階（B.C.4世紀～A.D.10世紀頃）、②長床犁段階（10世紀頃～16世紀頃）、③備中鍬段階（16世紀頃～19世紀）、④無床犁＝短床犁段階（19世紀以後）に分けるならば、16～17世紀は②から③への移行期であり、とくに先進地ではすでに③が支配的であり、また後進地ではなお②が支配的であったのに対して、中途地では②が一般的なところに③が導入されようとしていた。だから、農法が段階的に転換されようとする時期において、なお後進的な農法が一般的であるところに、先進的な農法を導入しようとするとき、農書は成立するもの、ということができる。したがって、また、岡氏のいわゆる「小農技術」とは、②の段階のなかで次第に成長してきた③の農法であった。

▶このような仮定が果して成立するかどうかを、西欧において検討してみよう。西欧において最も早く農書の成立するのはイギリスである。イギリスにおける農法の転換期を、①二圃式→三圃式（11～13世紀）、②三圃式→改良三圃式（16～17世紀）、③改良三圃式→輪栽式（18～19世紀）に分けると、イギリスにおける最古の農書、ウォーター・オブ・ヘンリーの農書（手書き）は、①の段階に成立することがわかる。ついで②は、まずレイ農法（開放耕地制における条地を数年間、耕地強制から分離して休草地とし、以

後、ふたたび耕地強制にまどす農法)が一般化して後、栽培牧草が普及するのであるが、イギリスにおける最初の活字による公刊農書であるフッツハーバートの農書は、レイ農法の段階で成立し、以後、活字に刊行される農書は、いずれも栽培牧草の紹介を主要な目的としている。すなわち、これらは②の段階において成立したことがわかる。

▶このようにみてくると、農書は、日本においてもイギリスにおいても、ともに、農法そのものの転換期に、先進的な農法を後進的な農法のなかに導入しようとするときに、成立するものといえることができるであろう。(録沼記)

【討論要旨】

①日本における封建小農の自立と農書成立の関係について。録沼氏は特に、室町期の名主層に中心を置く半の浅耕を中心とする技術の普及するところから、農書成立の契機が生まれ、致慶の書札による深耕多肥の技術が作り出されたこととした。

②北ヨーロッパの農書の成立と展開について。録沼氏は、13Cにイングランドで農書が成立するが、これは中世農業革命ともいえる二圃式から三圃式への移行期であった。そして、このハニリー農書は、封建領主のための農書であって、個人の小農のためのものではない。その理由として、イギリスでは共同体規制の強さが考えられることとした。また、1523年の最初の活字本農書フッツハーバートの農書は、日本の宮崎安直による『農業全書』にあることとする。実際は農業をやっていた者の経験が詳しく書かれ、牧草の記述はないが、レイファーミングの記述がされている。(徳永記)

③翻訳

- ・ソブール・資本主義と農村共同体 (共訳, 1956, 未来社)
- ・ゲルデス・ドイツ農民小史 (1957, 未来社)
- ・ブロック・フランス農村史の基本性格 (共訳, 1959, 創文社)
- ・ヴェルト・農業文化の起源 (共訳, 1968, 岩波書店)
- ・グルグ・世界農業の形成過程 (共訳, 1977, 大明堂)
- ・天蔵永常・広益国産考 (現代語訳注解説, 1978, 農山漁村文化協会)

◀飯沼二郎先生 著作目録▶

飯沼先生は、本年3月をもって、二十数年につけて勤められた京都大学人文科学研究所を、御退官されました。3月20日には、退官記念講演会が、4月12日には東友会館で退官記念パーティーが盛大に行なわれました。自由の身になられて、いよいよライフ・ワークの執筆にかかられる由、今後の御活躍をお祈りします。以下は、退官講演の際に配布された飯沼先生の多彩で旺盛な著作活動の記録です。(雑誌論文は省略しました。)

(1) 著書

- ・農業革命論 (1956, 創元社)
- ・農学成立史の研究 (1957, お茶の水書房)
- ・資本主義への道 (共著, 1959, ミネルヴァ書房)
- ・資本主義成立の研究 (共著, 1960, 未来社)
- ・ドイツにおける農学成立史の研究 (1963, お茶の水書房)
- ・地主王政の構造 (1964, 未来社)
- ・増補農業革命論 (1967, 未来社)
- ・信仰・個性・人生 (1968, 未来社)
- ・明治前期の農業教育 (1969, 京大人文研)
- ・風土と歴史 (1970, 岩波書店)
- ・キリスト者と市民運動 (1970, 未来社)
- ・日本農業技術論 (1971, 未来社)
- ・見えないうるさー在日朝鮮人 (1973, 日本キリスト教団出版局)
- ・国家権力とキリスト者 (1973, 未来社)
- ・石高制の研究 (1974, ミネルヴァ書房)
- ・イエスの言葉による行動のための手引 (1974, 日本キリスト教団出版局)
- ・日本農業の再発見 (1975, 日本放送出版協会)
- ・農具 (1976, 法政大学出版局, 共著)
- ・日本農法の提唱 (1977, 富民協会)
- ・産道一ムラとまちの運命 (共著, 1978, ダイアモンド社)
- ・歴史のなかの風土 (1979, 日本評論社)
- ・日本の古代農業革命 (1980, 致摩書房)

(2) 編著

- ・熱河官教の記録 (1965, 未来社)
- ・世界資本主義の形成 (共編, 1967, 岩波書店)
- ・世界資本主義の歴史構造 (共編, 1970, 岩波書店)
- ・沢崎聖造の信仰と生涯 (1974, 未来社)
- ・農業を復権する (共編, 1976, 東洋経済新報社)
- ・近世農書に学ぶ (1976, 日本放送出版協会)
- ・織田植次千ヶツクン (共編, 1977, 日本キリスト教団出版局)
- ・近代朝鮮の社会と思想 (共編, 1981, 未来社)